

ピブラハワ発掘の今昔と問題点

中 村 瑞 隆

釈尊の宮殿カピラ城は何処にあるかという調査は十九世紀の半から多くの学者や探検家たちが仏教経論や法顕（五世紀初頭）・玄奘（七世紀中頃）など中国僧のインド仏跡巡礼記によって、舍衛城を起点とし示唆された方向と距離をもとに行ってきた。しかし、法顕伝も西遊記も今日のような地理的経緯と正確な里程を示すものではなかったから探索者によつてそれぞれ異なる遺跡・古墳をカピラ城と比定し、帰一するには至らなかった。

釈尊の聖誕を記念する阿育王の建てた石柱が一八九六年、ルミンディイから発見され、石柱の刻文からルミンディイが昔のルンビニ園であることが確定した。ルンビニ園の発見はカピラ城探索を安易ならしめた。というのは、法顕も玄奘もカピラ城東方約一五マイル内外でルンビニ園に達しているから、ルンビニ園の確定によつて西方約一五マイルの距離周辺にある古墳遺跡に標的を定めればよいこととなつたからである。

しかし、法顕と玄奘はほぼ同じ旅を続けながら舍衛城とカ

ピラ城に到る記述には二重のくい違いが見られる。(1)法顕はカピラ城が拘那含仏の塔の東にあると記し、玄奘はカピラ城から南五〇里の拘楼秦仏の塔へ、拘楼秦仏の塔から東北三〇里にある拘那含仏の塔へ巡礼している。従つて玄奘によればカピラバストは拘那含仏の塔の西北に当ることとなる。また玄奘は拘楼秦仏のストーパの側には師子の像を刻んだ阿育王建立の三十余尺の石柱があつたこと、拘那含仏のストーパの側にも師子像を刻んだ二十余尺の阿育王石柱のあつたことを記しているから、カピラバストの探索には阿育王石柱は大きな手がかりとなつている。(2)カピラバストとルンビニとの距離の違いである。法顕はカピラバストから直接ルンビニに道を取り五十里、玄奘はカピラバストから東南三十里の箭泉へ、それより東北に八・九十里歩いてルンビニに到達している。法顕と玄奘の二重のくい違いに対し、ピンセント・スミスは法顕伝のカピラバストと東方ルンビニの距離五十里（約九マイル）説に従い、ルンビニを中心として西に半径九マイ

ルの孤を描くとき、その孤はビブラハワ（インド領）近くの遺跡群を通り、他の遺跡群とは交らない。従つて法顯の訪れたカピラバストはビブラハワに違いないと考え、他方玄奘の西域記によつて西に半径十四マイルの孤を描くとき、その孤は大遺跡の中央部にあるチラウラコット（ネパール領）を横断する。即ちチラウラコットの遺跡群は玄奘の訪れたカピラ城であるとした。しかし、法顯と玄奘がカピラバスト内やその周

辺で十二を数える同じ物を見ているのである。従つて両三蔵の記してあるカピラバストとルンビニの距離が一致しないからといつて法顯と玄奘の訪れたカピラバストは異り、二ヶ処のカピラバストがあつたとはなし難いのである。ペッペがビブラハワで大石棺を発見した数年後に、ビブラハワを検証したインドの考古学者ムケルジ^③は法顯と玄奘の記録を再検討し、經論のカピラバストの状況描写や西域記にある拘樓秦仏と拘那含仏のストーパの側の阿育王石柱の所在とカピラバストの地理的關係、などから、「ビブラハワにある巨大な遺跡群は恐らく釈尊の晩年舍衛国の毘琉璃王によつて破壊された後で、カピラバストから移住した釈迦族によつて建立されたものである。それ故にこそ、カピラバストはビブラハワからそれほど遠くない処に求めるべきであるとして、經論や巡礼記の記述をもとに八理由をあげ、スミスが玄奘の訪れたカピラバストを考えたチラウラコットを舍衛国の毘琉璃王によ

つて破壊され、釈尊が出家するまで過されたカピラバストとし、釈迦族が仏舎利の八分の一を得てストーパを建て奉祀供養した処がビブラハワであるとしたのである。

ムケルジのチラウラコットは滅亡したカピラ城、ビブラハワは仏舎利を奉安した場所と同様、ヴォストヤリス・デビツツもチラウラコットは旧市、ビブラハワを新市と考えたのである。

インドとネパール国境柱第四標柱の南半マイル、ルンビニ園より西南九マイルに巨大な古墳群がある。古墳の南側のビブラハワの人々はビブラハワコットといい、北側のアリガハワの人々はアリガハワコットと呼んでいるが、一般にはビブラハワの古墳で通っている。

一八九七年、ビルドブルの地主ベッペはこの古墳で約一六×一〇×三インチの煉瓦で造られたストーパを発見し、深さ八フィート発掘をして中止した。同年十月、ヴェインセント・スミスはビブラハワのストーパを調査し、ストーパは重要且つ古代のものであることを発表し、ベッペに何かが見出されるとすれば中心部、そしてグラント・レベルであるだろうと語り、発掘を続けるよう慫慂した。

一八九八年ベッペはストーパを十フィート四角に発掘し、頂上から十フィートのところで石礫石の壊れた小さな壺を発見した。壺には泥土がつまつていたが、水晶・金の装身

具、ビーズなどが入つていた。十八フィート掘つたところで四・四×二・八×二・二フィートの良質の砂岩製の貴重品函を発見した、函蓋の重さは一五三七ポンドあり、函の蓋は四つに割れていたが、函の中味には少しの損傷もなく、中には四個の石鹼石の壺と水晶の鉢とが入つていた。

一、石鹼石の壺、高さ六インチ、直径四インチ(舍利壺で、碑文が刻まれていた。)

二、石鹼石の壺、高さ七インチ、直径四・五インチ。

三、石鹼石の容器、高さ五・五インチ直径五・五インチ(この容器に相応した蓋は離れてあつた。)

四、石鹼石の小さな壺、高さ約一・五インチ、直径三・八インチ。

五、蓋のある水晶の鉢、高さ約三・五インチ、直径三・三インチ。

舍利壺には数片の骨が入つており、その他に金の装飾品、金のビーズ、上半身が裸体で下半身は衣類をつけた女人像を刻んだ金板、渦巻模様のついた厚く大きな円形の直径二インチの金板、象や師子を刻んだ金板、背には三宝の印、前面には卍の印のあるもの。卍の印だけをつけた数片、六枚または八枚の花弁をもつた数多くの星や花模様の銀や金の薄片などで、銀は錆びていたが金は美しく輝いていた。寶石では花と星形のもの、鋸歯状や葉脈のもの、三宝印、ピラミッド、色

々の形や大きな穴のあいたビーズ、白または赤の紅玉髓、紫水晶、黄玉、石榴石、珊瑚、水晶などであつた。

このように、大きな石の貴重品函には舍利の入つた舍利壺や容器と頼しい副葬品が入つており、単なる貴重品函ではなくて大石棺であつた。ストーバの大きさは高さが二一・六五フィート、地面での直径は一一フィートもあつたこと、頂上から十フィートの深さに一つのパイプ管があつて煉瓦にとりまかれ、一フィートの直径で二フィート下り、四インチの直径に縮り石棺の底の面に達し、煉瓦積みは石棺の下二フィートまで続いており、パイプもそこで終つていたことを記し、私は注意深くこのパイプを調査したが何も見出さなかつた」と述べ、ベッペは石棺と丸いパイプと石棺の下二フィートまで続いている煉瓦積を見つけ発掘を終えたこと、更にピブラハワの大ストーバの周辺には僧院や他の建築物と思われる遺跡群があることを報告した。

ピブラハワの大ストーバから発見された頼しい出土品の中で最も注意を引いたのは舍利壺に記してある古いバーリ文字の碑文であつた。その碑文を最初に解説したのはビニューラーであつた。氏は碑文に少し修正を加え、Iyam sahila nidhane Buddhassa bhagavato sakiyanam sukiti bhatinam sabhaginikannam saputradalanam「聖なる仏陀のこの遺骨の容器は釈迦族のスキティ兄弟達が、彼らの姉妹たち、息子たち、そして妻

たちと共に（奉祀したものである）」と翻訳をした。即ち、舍利壺に納められている舍利は釈迦族の人々が奉祀した聖なる仏陀の舍利であると解説した。碑文の中の *sakhi* を固有名詞と見るか、*sakriti* 又は *sakritu* と見るかによつて異なる訳が与えられるけれども、「仏陀の舍利」と訳したのは、イギリスの仏教学者リス・デビッズ (T. W. Rhyds Davids)、ドイツのインド学者ビシエール (R. Pischel)、フランスのインド仏教学者スナール (E. Senart)、ドイツの東洋学者リューダス (H. Luders) などである。これに対してイギリスの東洋学者フリートは碑文の *saki* の上に *yanam* という二シラブルがあるのを、この *yanam* は *saki* を刻り終つて余白がなくなつてその上に置いたものと見、碑文の順序を変えて、*sakhi-bhainam* から始まり *sakiyanam* は最後の言葉と考え、「これは姉妹たち、子供たち、妻たちと一緒にの良き名声をもつものの兄弟たちの、即ち、仏世尊の親族の舍利の容器である」と訳した。即ちフリートによれば容器の中の舍利は「釈尊の親族である釈迦族のもの」となる。この訳に近いのがフランスの東洋学者シルヴァン・レヴィの訳である。またフリートは *sakhi* を固有名詞として訳した。このように小さな舍利壺の碑文に対して、一は「仏陀の舍利」他は「釈迦族の人々の舍利」とする二通りの訳がなされた。そして仏舍利説をとる人々はこのピブラハワ出土の仏舍利こそ釈尊入滅の時に釈

迦族が仏舎利の八分の一を奉持安置したものであつて、大般涅槃經などに記述されている伝承がこれによつて史実であることを裏書きするものであると考えてきたのである。

インド考古局は一九七一年一月からピブラハワの発掘を再開した。そしてその成果は監督官スリバスタブ氏によつて研究雑誌に「ピブラハワにおける最近の発掘ノート」と題して発表された。七二年の一月から三月までの発掘で、土製の塔の中央において八二×八〇×三七センチの煉瓦製の二小室を発見し、一つの小室の底部に最大径七センチの石鹼石の壺があり、黒く焦げた遺骨が入つており、蓋に使用された直径二六センチの二枚の皿も出土した。他の小室にも二枚の皿をもつ最大径九センチ、高さ一六センチの石鹼石の壺があつたこと、塔の直径は約三〇メートルであつたこと。北方黒色磨研土器の破片が塔と同時期に属す地層から発見され、二壺は西紀前五世紀から四世紀に遡るものであつて、ベッペ発見の碑文の刻まれた壺よりも年代的に古いと思われると報告された。

また、同氏は七三年の発掘の成果として、塔の東側の僧院跡から三一個のシールを発見したと報告した。七六年一月二四日の *The times of India* 紙の「喪われた町カピラバストの発見」には、四〇個のシールとカピラバストの銘文のあるポットの蓋を発見した。シールにはブランミー文字で、*o*

また、同氏は七三年の発掘の成果として、塔の東側の僧院跡から三一個のシールを発見したと報告した。七六年一月二四日の *The times of India* 紙の「喪われた町カピラバストの発見」には、四〇個のシールとカピラバストの銘文のあるポットの蓋を発見した。シールにはブランミー文字で、*o*

devaputra vihare Kapilavastu bhikṣu sanghasya（私訳、デーバプトラの僧院におけるカピラバストの比丘僧伽の（もの））とあり、「デーバプトラは天の子と自称していたクシャーナ王朝のカニシカ王（A・D一四四—一七〇年頃）であるから、シールの銘文によれば、「この僧院はカピラバストの僧の懇情によつて王が建てたものであつて、考古学者達が必要としている決定的証拠である」といい、二舍利壺については「私達が見つけたのは仏陀の遺骨の入つた本物の壺と灰の入つた三枚の皿であつた。ヒブラハワが真実にカピラバストであるという証明にこれ以上何が必要であらうか」と述べている。

そして、「幾多の学者が長い間、はつきりした考古学的裏付けもないまま、チラウラコットこそカピラバストであると主張した間違つた確信の根拠は中国の巡礼僧法顕と玄奘による記録である」「ベッペは碑文を記した壺を発見した。……けれどもその碑文は相異なる解釈がされた。それは仏陀と釈迦族の人々のことについて触れたものである。その文字は紀元前三世紀のものであるが、仏陀の死んだのは前五世紀である。学者達は時間の違いを解決することが出来なかつたのである」「ベッペの見つけた舍利壺はただの複製品だと思う」「僧院と塔の位置を確定した氏は次の段階として古代の町を発見することに努め、二つの大煉瓦建築を発見した。多くの遺物や建築構造からいつて、これが釈迦族の長仏陀の父淨飯

王の住居群であることは間違いない」とも述べている。

シールは他処から移動するものであることを考慮しなければならぬが、インドのシールの使用法から考えて、クシャーナ時代の地層からカピラバストの銘のある四〇のシールとポットの蓋の発見によつて、三世紀頃ヒブラハワのカニシカ王寄進の僧院にはカピラバストの比丘達が住んでいたことを知ることが出来る。今年五月刊行のネパール仏教界の出版物には四〇シールの中には紙上に発表された on devaputra ……sanghasya のシールの他に mahakapilavastu bhikṣu sanghasya（大カピラバスト比丘僧伽の（もの））とあるシールも混つてあることが記されている。ヒブラハワの仏塔と僧院の規模から考えてかなり多くの比丘達が起居していたに違いない。二種のシールの最後の語が sanghasya となつていくことから見て、比丘達が自分の所属する団体名のあるシールを用いて自分達の持物であることを表示したものであると思われる。仏典には釈迦国の八都市名が見られるが、カニシカ王後の三世紀頃にはカピラバストとマハーカピラバストは同か異か。インド側未発表のマハーカピラバストとあるシールの前に on devaputra vihare がないのを省略と見るべきかどうか、もし省略でないとなればカピラバストとマハーカピラバストは異ると見られないか。未発表のシールについてもその所見がやがて発表されることになるだろう。

「ベッベが塔の頂上から十八フィートの地点で石棺を発見したが、スリバスタブ氏は土製の塔を発見し、深さ六メートルで二小室があり、塔は三段に分れて建てられていたことを報告した。氏の発見した小室とベッベ発見の石棺の間隔は報告されていないが、約六〇センチの間隔があると考えられる。ベッベは石棺の下に煉瓦のあることを確認したのに対し、スリバスタブ氏は土製の塔を発見したという。一般に煉瓦製よりも土製が古いとされるが、しかも土製の塔の中に煉瓦の小室があつたとすれば、塔と二小室とは同時代に造られたものかどうか。また小室が煉瓦製であることを考えると約六〇センチの深所といつても、ベッベ発見の石棺とスリバスタブ氏発見の小室とは同じレベルではなかつたかどうか。

ベッベは大石棺が良質の大砂岩を掘抜いたものであり、ピブラハワより北方では産出しない石であり、函蓋ともに立派で製作にあつては経済力と政治力のある人の介在が考えられると記している。その石棺の中に入っていた舍利壺が複製品に過ぎないとすれば、前五世紀に入滅した釈尊や殺戮された釈迦族の人々のために、誰人が前三世紀になつて大石棺と多くの副葬品を供えたのか。それまで何処に安置されていたものをピブラハワに改葬したか。そして、その人達はその少し下の煉瓦製の小室を知らなかつたのか。もし仏舍利であることを知っていたとすれば何故立派な石棺に安置しなかつた

か。

また、塔が三段に分れ、二小室が煉瓦製ならば、三段とは何時代と何時代に区分されるか、頂上より一〇フィートから始つたパイプと石棺と時代区分との関係はどうか。そして三段の中、古い地層が仏滅とほど遠くないとするならば、その当時中印北部の他の地区でも煉瓦が用いられていたことが明らかにされなければならないだろう。新たに発見された二舍利壺に刻文がないことから仏舍利壺と直ちに決定し得ないことは勿論であるが、同一人の舍利を奉祀したものであるならば何故二壺に分けたか。二壺は別人のものと考えられないか。もし石棺と二小室とが同じレベルであるならば、二小室の舍利壺は仏陀以外の仏教関係者のものであることはあり得ないことではないのではないか。

法頭は五世紀初頭、玄奘は七世紀の前半にカピラバストを訪れている。両三蔵がカピラバストを訪れながら仏舍利の塔に何等関説していないのは一体どう解釈してよいのであろうか。両三蔵の訪れたカピラバストはピブラハワのカピラバストとは別の場所を訪れたと言つてよいのではないか。或は両三蔵の訪れた時は釈迦族の人々の塔であることだけが伝えられて仏舍利塔であることが忘れ去られていたのであろうか。また玄奘はカピラバスト周辺において二本の阿育王柱を見ている。現在ネパール領チラウラコットから北東二マイル弱の

ニグリハワ池辺に阿育王の石柱があり、南五マイル弱のゴータハワにも阿育王の石柱がある。池辺の石柱は玄奘の記する拘那含仏のストーパの側にあつたものであることは刻文から明かであつて、玄奘の記す位置にあるならばチラウラコットがカピラ城であることの根拠となるのであるが、他処から移動したことが明白で、その原位置は知られていない。また、ゴータハワの阿育王石柱は銘文のあるべき辺の上部から壊失しているので拘楼秦仏のためのものということは出来ない。もし拘楼秦仏の石柱であることが明かになるならば、その位置からいつてもチラウラコットがカピラ城であることに役立つ。

ピブラハワが宮殿カピラ城であることを論証するためには、ゴータハワの石柱とニグリハワの石柱とは元来一本のものであつたのを、ゴータハワ石柱の上部を誰人かが北東約六マイルのニグリハワ池辺に移動したものであり、拘那含仏の石柱であることを明かにしなければならない。また玄奘が拘那含仏の石柱は拘楼秦仏石柱の東北三〇余里（五マイル弱）と記しているが、ゴータハワはピブラハワの西北八マイルに位置しているから、玄奘が東北と記しているのを西北に改めなければならぬ。もしそれによつて拘那含仏の石柱が説明されたとしても、カピラバストの南方五〇里にある拘楼秦仏の塔側の三〇余尺の大石柱がピブラハワの南方約六マイルで発

見されなければならない厄介なことが残される。

ベッベ発掘の舍利壺の碑文を「仏舍利を奉祀したもの」と解説した学者も、「釈迦族の人々のもの」とした学者も、カピラバストは毘琉璃王によつて攻撃され滅亡したという伝承に立ち、カピラバストはピブラハワの古墳群即ちストーパや僧院より他の場所にあるとし、ピブラハワの大古墳は毘琉璃王の攻略によつて滅亡し移住した釈迦族によつて建立されたものと考えたのである。今回発見された二舍利壺が仏舍利壺で、石棺の舍利壺が複製品であることが確認されても、学者達が述べてきたように、滅亡したカピラバストは旧市にあると見るか、大ストーパと僧院のあるピブラハワは首都の郊外か一部に位置していると見るかは別として、宮殿カピラバストはピブラハワの大ストーパと僧院のある遺跡とは別の場所にあるとしている。

この点については紙上にも「この修道院とストーパの位置を確定したスリバスタブ氏は次の段階はその古代の町を発見することだ。大規模な発掘で大きな煉瓦建築を二つ見つけた。さまざまな遺物やこれらの建築の構造の性質からいって、これが釈迦族の長、仏陀の父親であるシュドーダナ王の住居群であることは間違いない」と述べたことを記している。氏の言うように、二つの煉瓦建築これが釈尊の出家前の宮殿カピラバストなのかどうかである。

ビブラハワの遺蹟群についてはムケルジーが詳細に報告し、「ビブラハワの近隣にある古墳群は釈迦族がストーパと僧院を設立した重要な町であるが、大般涅槃經のカピラバストの釈迦族の記述や他の年代記から明かにされたように、(カピラバストは)その古い町から余り遠くない」と結論したのである。ビブラハワの近くにある大遺構としては南一マイルにガンワリヤコットがあり、その東南二マイルにピパルンコット、西北四マイルにはシサハンニヤコットがある。ピパルンコットは小に過ぎ、シサハンニヤコットはネパール領であつて、スリバスタブ氏が二つの大きな建築物を発見したのはガンワリヤコットであると思われる。

釈迦族の祖先は何時頃からカピラバストに定着したかは明かにすることは出来ないが、經典によれば、釈尊の祖先は釈尊より数代遡るものと見ることが出来るから、宮殿カピラバストからはインドの考古学上その時代を推定し得る彩文灰色土器を始め遺物が発掘され証明とならなければならぬし、中国資料も含めて宮殿カピラバストを探索するとき「宮城の周りは一四或は一五里(約二マイル)瓦を疊ねて基趾を成す」と記した玄奘の記録と相応している大城壁をもち、ルンビニを中心とする十五マイル以内にあることも要件となつてゐる。

註

- 1 法顯伝の迦維羅衛城(大正五一・八六一)
- 2 西域記卷六の劫比羅伐窣堵国(大正五一・九〇一)
- 3 Vincent A. Smith, Report on a tour of exploration of the antiquities in the Tarai, Nepal. p. 10.
- 4 P. C. Mukherji, Ibid. p. 43~55.
- 5 Major W. Vost, "Identifications in the region of Kapilavastu," p. 553.
- 6 T. W. Rhys Davids, Buddhist India (London, 1917) p. 18.
- 7 William C. Peppe, The Piprahawā Stūpa, containing relics of Buddha. pp. 573~578, J. R. A. S 1898. with a Note, by Vincent A. Smith, pp. 581~584.
- 8 G. Bühler, Preliminary note on a recently discovered Śākya inscription, J. R. A. S. 1898. pp. 387~389, 東北福祉大学論叢第十四巻「杉本卓洲「舍利八分と仏塔建立の伝説」
- 9 J. F. Fleet, The inscription on the Piprahawa vase. J. R. A. S 1906. pp. 149~180.
- 10 K. M. Srivastava, Purātattva. p. 51.